

12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。

13 兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えるはいません。ただ一つのこと、すなわち、後ろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、

14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。

一年の最後の主日礼拝を持っています。物事の最後は「エンド」と言いますね。エンドは「目的」「目標」という意味もあります。つまり今日は一年の最後の主日ですが終わって何もないのではなく、これから目標に向かって歩み出す時でもあるのです。今年も私たちはコロナ禍の中を歩いてまいりました。このような期間を過ごしていることをみなさんはどのように受け止めておられるでしょうか？例外的な期間と思う人もいれば、人生後退した期間であるから早く取り戻さなければと焦る人もおられると思います。もっと長引けば自分が何か一人取り残されたように感じる人がいるかもしれません。今日は私達の人生は神様の確かな御手の中にあること、そして目標を目指して共に歩み続けていることをピリピ人への手紙を記したパウロの生き方から学んでゆきたいと思います。

1) 私たちの人生は到達するゴール(目標)に向かっている。パウロにとって、この世の人生とは天国を目指して走る人生でした。ピリピ人への手紙は別名獄中書簡と言われるようにパウロは不自由な牢に繋がれている中でこの手紙を書きました。手紙の中でパウロは人に対する恨みつらみを書いてはいません。反省して自分のことを責め立てるようなことや後悔の思いも書いていません。それまでとは違う不自由な中であって、今までと変わらず天国を目指す人生を走っていることを書いているのです。

私たちは普段、このような崇高なゴール、崇高な目標というものをあまり考えないと思います。今日やるべきリストの中に、「天国を目指して走る」なんて一言も書いている人はいないと思います。やるべきリストの中に1. 今日ヨーグルトを2パック買う。2. お昼に郵便局に寄ってお金を下ろす。3. 今日天国を目指して走る。なんて書いている人はいません。しかし忙しい日常の中で何らかの形で天国へ行く準備をしている、あるいはその方向に向かっているという意識を持つことは必要ではないかと思います。それは皆さんがすでにやっておられる、みことばを読むこと、祈ること、賛美することと言えるでしょう。そのような準備が何も無いと死に瀕した時に「死」という最悪の事態を前にして足がすくみ、「自分は最期に、人生のゴールのテープを切ろうとしている」ということがイメージできないと思うのです。漠然と死に向かっていることはみんな分かっています。でもやっぱり他人の話になってしまいがちです。パウロは「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。」ピリピ1:6と言いました。自分自身がそして周りの状況がどんなに変わろうとも自分の人生がやがて完成に至ること、そしてキリスト・イエスの日が来る時に、自分の人生はゴールを迎えるということをパウロは確信しているのです。

ピリピ3:14に「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。」とあります。栄冠を得るというのは、ゴールの地点で、キリスト・イエスが勝利の「栄冠」を持って待っているということです。辛くとも、苦しくとも一生懸命人生を走ってきたけれどゴールに着いたら誰もいなかったということではないのです。私たちの人生の先には、イエス様が、神様が待っていてくださるのです。

この人生で栄冠というものにほとんど縁がない人生を自分も含めて殆どの方が送っています。私は賞状とかメダルなんてもらった記憶が殆どありません。しかし私たちの小さな努力、大きな努力も含めて、最終的にゴールでイエス・キリストは私たちに栄冠を被せてくださるということです。しかもピリピ3:12の終わりに「それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです」とあります。この言葉が示す意味は大きいと思います。自分で自分の力によって走っているだけではない。キリスト・イエスが私を捕らえてその道を行き、そしてやがて勝利の栄冠を被ることができるように、主は私を導いてくださっている。私たちの人生は色んな山坂があり、色んな苦勞があります。色んな幸せもあります。私たちの人生の目標はどっぷりこの世のこと、この世界のことには浸かっています。しかし、「実は私の人生はこの目標に、つまり神の栄冠を受ける方向に向かっているんだ」ということを思い出し、覚えているということが大切なのではないのでしょうか。

2) 私たちの人生は明日に向かって開かれている。

ゴールに向かう人生というのは、うしろのものを忘れる人生だと記されています。「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み」とはいったいどういうことなのでしょう？ 考えてみると、うしろのものって、なかなか忘れられないですよ？ うしろというのは、これまでの自分の人生と考えたら良いと思います。良きにつけ、悪きにつけ、自分が犯した過ち、自分が築き上げて来た成功、霊的なものも日常的なことも、自分は様々に培われて来た自分を持っているわけです。それを忘れるというのは、結局それに執着しないということです。私たちは良いことはいつまでも覚えておきたい、自分だけでなく人にも覚えておいて欲しいと思ひ。悪いこと、嫌なことは忘れたいのになかなか忘れることが出来ないうでいます。中にはそんな簡単に忘れて、気にしなくなったら今までの自分の人生は何だったのかと空しい気持ちになるので憎しみと恨みを握りしめている人もいます。ですからパウロが「うしろのものを忘れて」と言っているのは、良いことであっても悪いことであってもこれまでの自分の人生に執着しないようにしなさいということなのです。なぜなら、信仰の人生も含めて、私の人生は明日に向かって開かれているからです。明日に待ち受けている更なる試練もあるでしょう。でも更なる恵みもあるのです。それに向かつて、私は開かれているのです。

これまでず～っと自分が歩んで来た人生に執着せず、捕われることもしない。それができない限り、私たちは前向きにはなれません。パウロは13節の一番最後に「ひたむきに前のものに向かって進み」と言いますが別の聖書には「前のものに向かって、ひたすら身を伸ばす。」とあります。背伸びをして、あるいは手を伸ばして、ぎりぎりのところでもう一つ無理をすると5ミリあるいは1センチ伸びる可能性があります。ある人はこう言いました。「神さまがなおも与えてくださる信仰の『伸びしろ』のようなものである。」と。「伸びしろ」つまり成長するための余裕、余白ですね。「あなたの信仰はまだ伸びる」「あなたの信仰はまだ成長できる」そういう風にして、私たちは前のものに向かって手を伸ばすのです。そんなに大それたことでなくても良いのです。一日5分祈っていたのを10分にするとか、思い切って未信者の知り合いに福音を語ってみるとか。天のゴールに至るまで、私はもうすでに捕らえた、なんて思う必要はないのです。『伸びしろ』は、私の前にあるということです。

3) 目標に向かって私達は走っています。

「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」ピリピ3:14とあります。目標を目指して一心に走るとは孤独な戦いを続けているという意味ではありません。パウロは敢えて言うなら、一人で走っているのではないです。テモテと共に走っています。同労者エパフロデトと共に走っています。そしてピリピの教会の信仰者と共に走っているのです。この信仰レースはパウロのものだけではなく。また一番、一等になることを目指しているレースで

もありません。目標を目指して一心に走っているのですが、私たちは皆どこかで挫折し、どこかで助けられ、そしてどこかで助ける—これが信仰者のあるべきレースです。そして最後には走る者皆が無事にゴールする。このように考えますと、パウロが人生を「目標に向かって走る競技」に例えた時に、一位になることを目指すような競技ではないと想像します。そうではなく時間も順位も無関係で参加した者すべてが栄冠を得るゲームのようなものをパウロは描いているのです。

誰かが弱り果てていたら、力に、栄養になるものを差し出してあげる。また自分が疲れたら「助けて下さい」と言う。そんなことを繰り返しながら全員がゴールに到達する。そして主が用意してくださっている賞を受ける。これが私たちの教会の姿であろうと思います。

新しい年をこれから迎えるにあたり、明日に向かって私たち信仰者の人生は開かれています。受けるべき神の栄冠を目指して、共に待っていてくださるイエス・キリストに近づいてゆきたいと思います。

祈ります。